

タイトル	高山寺蔵『禅上房書籍欠目録』の書き入れについて
著者	徳永, 良次
引用	北海学園大学人文論集, 26・27: LXXI-XC
発行日	2004-03-31

高山寺蔵『禅上房書籍欠目録』の書き入れについて

徳 永 良 次

一

高山寺蔵『禅上房書籍欠目録』（高山寺聖教類第一部248号）は、鎌倉時代の高山寺草創期に作成された聖教目録である。この目録の内容については未解明な部分が多かったが、奥田勲氏、宮澤俊雅氏らによつて次第に明らか^注にされ、筆者も検討を加えてきたところである。しかしながら、未だにその全容は明らかになつていない。

その理由としては、

①本目録が存在している聖教ではなく、いわゆる「欠書」についての一覧、あるいは備忘のための目録であると考えられ、高山寺経蔵に現存している聖教との対応をさせることが極めて難しいこと。

②高山寺の「公的な」聖教目録の中に、どのように位置づけるべきか判然としないこと。

③関連して、高山寺の教学活動の中で、いかなる位置において考えるべきかについても明らかになつていないこと。

④「禅浄房（禅上房）」の事跡が明らかでないことと、彼の寺内での役割もはつきりしないにもかかわらず、膨大な聖教を所持（あるいは管理）していたと見られること。などがあげられよう。

しかし、この聖教目録の価値についてはすでに私見を述べた事^注があり、高山寺草創期における聖教の保管と整理について、さらには寺内における教学活動を知る上においても重要な資料であり、その成立や内容について解明されるべきであると考えられる。

そのような中であって、本稿では、この『禅上房書籍欠目録』(以下、本目録、あるいは本資料と略称することがある)に随所に見られる「書き入れ」について検討し、本資料の位置づけを考える端緒としたい。

本稿では、まず高山寺における目録作成活動を概観し、『禅上房書籍欠目録』に見られる「書き入れ」全体を紹介し、特に僧侶名が複数記されている点に注目したい。その僧侶について、高山寺現存本等からその事跡を確認していくこととする。

二

高山寺における目録作成に関する活動については、奥田氏による詳細な御論考がある。^{注三}それによると、聖教目録が作成あるいは整備されたのはおおよそ鎌倉時代中期、室町時代、江戸時代寛永頃の三期に分けることができ、合計で二十六点を数える。奥田氏は江戸時代までに作成された目録を、現代の目録と区別して「古目録」と称しており、筆者もその呼称に従う。

また、古目録以外にも、高山寺本の現存する聖教にはその表紙や見返し、あるいは、奥書が記載されている部分などに当該聖教の来歴や所蔵などについての記録が記されていることがあり、これらを総合的に検討することにより、高山寺の聖教がど

のように蒐集され整理保存されてきたかの概要を知ることができる。

以下に、その古目録の内で、特に本稿に関係すると思われる、鎌倉時代までに高山寺で作成された聖教目録を年代順に並べてみることにする。その際、現装にこだわらず、現在判明している「成立当時の」状態を復元する形で整理して示す。

1 聖教目録(林月坊等)(第一部249号)

○鎌倉時代初期写、卷子本、

※「理行房目録」を除く「林月坊、禅忍坊、平泉寺律師顕範」の聖教目録を合冊した形で作成された

2 聖教目録^{禅浄房} (第一部246号)

○鎌倉時代寛喜三年(一二三二)写、卷子本、定真筆、(奥書) 右目録注進如件

寛喜三年五月十六日(花押)

※この直前に「禅浄房」が入寂したことを受けて、定真が中心となつて灌頂関係の聖教を整理し目録^{注四}を作成

3 高山寺聖教目録(第一部244号)

○鎌倉時代中期写、卷子本、

(包紙表書) 義淵上人／依後嵯峨院之仰注進 十無尽院／建
長二年／残闕／高山寺聖教目録 自一丁／至廿一丁

※奥書などはないが、右に示した江戸時代の包紙の注記によ
ると、「後嵯峨院の仰せによつて、建長二年に義淵上人(靈
典)が注進した」となっているが、成立の時期については
不明^{注五}

4 高山寺経蔵聖教内真言書目録(第一部247号)

○鎌倉時代建長三年(一二五一)写、卷子本、長真筆、
(奥書) 建長三年^{文永}四月六日校勘之了長真記之

5 聖教目録<sup>禅淨房
灌頂</sup>(第一部246号)(現存本)

○鎌倉時代建長三年(一二五一)写、卷子本、靈典筆、
(奥書) 建長三年辛亥四月一日重校勘記加之

高山寺知寺沙門靈典(花押)

※2の聖教目録に靈典が校合・増補を加え一巻としたもので、
これが現存する形態になっている

6 禅上房書籍欠目録(第一部248号)

○鎌倉時代中期写、卷子本、

※本稿で中心的に取り上げる聖教目録である。成立時期に関
しては不明な点が多いが、現在までに判明している点を考
慮すると、鎌倉時代寛喜年間から建長年間の間で作成され
たと推定される

7 聖教目録(林月坊等)(第二次)

○鎌倉時代写、卷子本、

※1の聖教目録に「理行房目録」を加えた、現存目録の形態
に整えられた。文永八年(一二七二)以降成立とされる

8 法鼓臺聖教目録上巻(第一部245号1)

○鎌倉時代中期写、卷子本、

※定真を中心としたメンバーにより作成されたと推定されて
いるが、未詳である

9 法鼓臺聖教目録中巻(第一部245号2)

○体裁等、8に同じ。

※但し書写年代はさらに下る可能性があり、鎌倉時代中期か
ら後期の間とされる

10 法鼓臺聖教目録下巻

※本来は8・9とともに整備されたと考えられるが、現存しない。江戸時代の経蔵再整理の際に、2と5に記載された「禅浄房の准頂」関係聖教を加えて作成されたのが、現存する法鼓臺聖教目録下巻(第一部193号4)である。これが、元の法鼓臺聖教目録下巻とどのような関係にあるかは不明である^{注六}

鎌倉時代に高山寺において作成された聖教目録は、現存本から推定するものも含めてこの10種類である。これらの古目録はすべて卷子本である点が共通しており、体裁等にも共通点が多いように感じられる。このうち、1と7の「聖教目録(林月坊等)」については、池田証寿氏により詳細な研究がなされており、当初別個に作成されたものが最終的には3の『高山寺聖教目録』に施入されたと指摘しておられる。

これまでの先行研究においては、高山寺草創期における聖教の実態を反映している古目録として、3・4・8と10の三種類(五点)が主要なものとして認められてきた^{注七}。

3の『高山寺聖教目録』は華嚴関係典籍を始めとして因明・三論・浄土・天台など真言関係典籍を除く幅広い範囲の聖教の

他に、和書・漢籍等仏典以外の典籍までも記載されており「明恵教団の高度な知的体系性が示されている」(奥田勲『明恵』)というものである。4の『高山寺経蔵聖教内真言書目録』は真言関係書を類聚したもので、宮澤氏による解説が公開されている。8と10の『法鼓臺聖教目録』は4以外の真言関係書で、寺内の法鼓臺に伝来した密教関係の聖教目録とされ、石塚晴通氏による解題が公にされている。前述の通り、従来は上記の三種類の聖教目録により、鎌倉時代の高山寺草創期における資料のほぼ全容がわかるとされていた。

これ以外の2・5と6の「禅浄房(禅上房)」という個人名を冠した目録については、従来あまり検討がなされておらず、特に6の『禅上房書籍欠目録』については記載内容が極めて特殊であるため実態を把握することが難しかった。しかしながら、2の部分には定真による奥書があり、書写年代が明確な高山寺古目録としては一番古いものであることから、その成立の由来を解明し高山寺初期におけるこの目録の位置づけを考えることは極めて重要であろう。さらに、6についても、詳細に見ていくと、高山寺の経蔵の体系が整えられていく過程を知る上で非常に貴重な資料であることが明らかとなってきた。

以下、この聖教目録の中から6の『禅上房書籍欠目録』に見

られる「書き入れ」を中心に検討し、本目録の高山寺初期における成立と位置づけについて考えたい。

三

聖教目録に書き入れがあることはそれほど珍しいことではない。例えば、インスペクションの際の合点やそれに類似の注記などは多くの聖教目録に見ることができ、この点は高山寺本に限ったことではない。また、欠本を示す書き入れや、部分的な欠本や員数など、あるいは伝持者など、さらには経蔵や人名などの固有名詞の注記に類するものまで考えれば、むしろこのような「書き入れ」は普通に見られるものであろう。

しかしながら、『禅上房書籍欠目録』には、これらとは様相を異にする書き入れがみられる。以下、それらの書き入れを出現順に、記載位置を箱番号・聖教名とともにしめす。

- | | | | |
|---|------|-----|------------------------------|
| 1 | 第十六箱 | 103 | 雜抄出現合點未校之後日可校之 |
| 2 | 第廿七箱 | 106 | 五教章上返入了 |
| 3 | 同 | 111 | 同(Ⅱ行願疏) 義記一部六卷 已上九卷
法智房借用 |
| 4 | 同 | 112 | 五教章指事下卷十眼房借用 |

- | | | | |
|---|-----|-----|---------------------|
| 5 | 第廿九 | 115 | 浄土義事一帖第卅卅一已上二合十眼房借用 |
|---|-----|-----|---------------------|

- | | | |
|----|-------|---------------------|
| 6 | 第卅二箱 | 十眼房借用 (但し墨書にて全体を抹消) |
| 7 | 同 | 117 菩薩戒集上中下法智房借用 |
| 8 | 第卅三箱 | 119 六物図一卷上見房借用 |
| 9 | 同 | 131 梵網經尺一帖法智房借用 |
| 10 | 第卅五箱 | 135 頌疏一部明心房借用 |
| 11 | 同 | 136 又頌疏十部之内教恵房借用少々 |
| 12 | 第四十四箱 | 157 古文孝經一卷法明房 |

以上の十二箇所が本目録に加えられた書き入れと見られる記事である。これらの書き入れは、その時期・人物ともに特定できるものではないが、筆致が本文とほとんど同じものが多いことから始めから本目録の作成者によって書き入れられたと見られる。

このうち、1の書き入れは、どのように解すべきか判断が難しい。素直に読めば、『雜抄(華嚴出現品か?)』という書籍については、インスペクションの結果、合点を付したが(実際に本目録には、合点が入っている)、この合点を付した後になって再度調査してみると、当該書籍が見あたらないので、再度調査

すべきである」という書き入れと考えられる。なお、考える必要があらう。1の書き入れ以外は、聖教の貸し出しと返却に関する記録であり、当時、複数の僧侶が実際に書籍の借覧をしていたという事実を知ることが出来る点で画期的な記事であらう。この点については、次節以降で検討する。

その他、この書き入れに関して特徴的な点は、位置が集中していることである。左に、本目録の箱番号だけ記載し、下に先ほどの書き入れ部分を聖教番号とともに試みてみると次のようになる。

第一箱	第十五箱	
第二箱	第十六箱	103 雜抄出現合點未校之後日可校之
第三箱	第廿六箱	
第四箱	第廿七箱	106 五教章上返入了
第五箱		111 同(〓行願疏)義記一部六卷 已上九卷法 智房借用
第八箱		112 五教章指事下卷十眼房借用
第九箱		115 浄土義事一帖第卅卅一已上二合十眼房借用
第十箱		十眼房借用(但し墨書にて全体を抹消)
第十一箱		117 菩薩戒集上中下法智房借用
第十二箱		119 六物図一卷上見房借用
第十三箱		131 梵網經尺一帖法智房借用
第十四箱		135 頌疏一部明心房借用
		136 又頌疏十部之内教惠房借用少々

- 第四十三箱
- 第四十四箱 157 古文孝経一卷法明房
- 第四十五箱
- 第四十六箱

本目録は第一箱から始まって、第四十六箱までが記載されているが、実際には右の一覧からも分かる通り、途中にかなりの欠番がある。単にひとつかふたつの箱番号が飛んでいるなら、本目録の性格からみて充分考えられるところである。しかし、本目録には第十七箱から第廿五箱までの九箱分がまったく記載がない。これに関しては別稿で述べたことがあり、本目録が作成された時点ですでに存在していなかった可能性もある。位置が集中している点に関しては、右の対応で明らかである。これらの聖教の借覧をしている僧侶名を抜き出してみると次の通りである。

- 法智房
- 十眼房
- 上見房
- 明心房
- 教恵房
- 法明房

これらの六名の僧侶が借覧していた聖教はどのような種類のものであろうか。『禅上房書籍欠目録』からだけでは、不明な点が多

いのであるが、記載された聖教名から推定すると、

- 第廿七箱 華嚴
- 第廿九箱 法華・浄土（注釈？）
- 第卅二箱 華嚴
- 第卅三箱 華嚴
- 第卅五箱 俱舍
- 第四十四箱 外典

となっており、第卅五箱と四十四箱の外典以外は華嚴関係典籍であることがわかる。

高山寺には、元來、明恵上人自身が華嚴と真言密教を兼学していたことから、弟子も華嚴関係を主に修行している僧侶と真言密教を中心に修得している者と分けてみられることが多い。例えば、明恵の高弟の中では、方便智院の第一世である空達房定真は、もと神護寺に住しており、また理明房興然の付法弟子であったことから分かる通り、真言教学に通じていた僧侶である。また、逆に十無尽院第一世の義林房喜海は、もと定真同様神護寺の僧であり当然真言密教にも通じていたが、総体として教学の内容は華嚴関係に通じていたことが知られている。

本目録に見える書き入れに関する限り、華嚴関係典籍に関わる聖教の借覧に集中していることが読み取れ、この方面での教
学活動に関して聖教の借覧が盛んであったことが分かる。

四

先に示した六名の僧侶の事跡はどのようなものであろうか。
先行研究や現存する高山寺聖教から判明する事跡を辿ってみる
こととする。

法智房（性実）

法智房性実は、性実——浄智——澄実と続く、高山寺内の僧
坊である善財院の第一世である。明恵の高弟であり、また正達
房勤果の付法弟子でもあると見られるが、詳細については不明
な点が多い。『高山寺代々記（第一九九箱1号）』によると、治
承二年（一一七八）誕生、文応元年（一二六〇）入滅。
高山寺現存本には、以下の三点の聖教に記事が見られるのみ
である。以下、聖教の配列は『高山寺典籍文書目録』（高山寺典
籍文書総合調査団編、東京大学出版会）における記載順とする。

1 梵網経記卷上（高山寺聖教類第二部26号1） 一帖

○寛喜二年（一二三〇）写、空弁写、

（表紙）「乙八十二」

（奥書）寛喜第二之曆窮冬最初之日病中／右筆奉書写畢是偏

為值遇戒法／悟入仏道矣 新発意比丘 空弁^{生年四十七}（中略）

自去年十二月十二日始同聞衆三人<sup>義林房法智房
子即子執筆</sup>

2 大方広仏華嚴経卷第二（新訳）（高山寺聖教類第四部第一三

箱18号）一卷

○鎌倉初期写、

（奥書）一交畢 性実

3 大方広仏華嚴経卷第二十六（新訳）（高山寺聖教類第四部第

二〇四箱8号）一卷

○鎌倉初期写、

（奥書）寛喜元年九月十六日校合了 性実／一交畢

法智房性実は、真言密教母尾流血脈や華嚴血脈などにはその
法統を見いだすことができない。高山寺内に蔵されている血脈
にも同様にその記載を捜し出すことが出来ない。

ただ、注目すべきは、先の一覧に示した1の資料の奥書に「自

去年十二月十二日始同聞衆三人義林房法智房
予即予執筆とあり、義林房喜海と

（禅浄房）空弁とともに明恵による『梵網経』の講説に聴衆として参加していたことがわかる。これは、次の『梅尾説戒日記』の記事とも符合する。説戒の著座の中にほぼ並んで三名の僧名が記載されており、寺内での関係を知る上で示唆的である。

○梅尾説戒日記（高山寺聖教類第四部第四八箱8号）一冊

江戸時代寛文九年（一六六九）写、永弁筆、

（書出）自寛喜二年二月中旬依御不例無説戒事（中略）彼著座衆／正達房 義林房 円道房 禅浄房 法智房／義洌房 禅忍房 順行房 恵日房 順正房／十眼房（以下略）

『梵網経』は華嚴関係典籍であることから、法智房は明恵上人の華嚴の法統を受け継いだものとも見られる。また、明恵の発意による華嚴経の書写作業に関しては、二点の聖教（右の2と3）に校合奥書を残している。しかし、正達房勤杲の付法弟子であることは真言密教との関係も充分考えられるところである。さらに関連資料を博搜していかないと確実なことは言えないが、真言密教と華嚴宗の兼学の僧侶であると考えられる。

十眼房（長真）

十眼房長真の事跡については、すでに奥田・宮澤両氏が詳細な紹介をしている。ここでは、宮澤氏の註釈を再述しておく。^{注八}

十眼房長真は、建久六年（一一九五）生れ、その出自は未詳である。貞応二年（一一三三）、二十九歳の時、高山寺の西房の南面で『常修仏光観略次第』と書写してゐる。また、同じ年の九月に高山寺で行はれた貞元華嚴経の書写に参加し、卷第十九・卷第廿九・卷第卅九を書写してゐる。寛喜元年（一一二九）乃至同二年（一二三〇）に、同じく高山寺で行はれた新訳華嚴経の比較にも加はり、卷第五・卷第廿一・卷第卅五・卷第卅九・卷第七十七を比較してゐる。寛喜二年には梅尾説戒に着座してをり、また『却廃忘記』にもその名が見え、明恵上人の晩年に近持して、付法も直接上人から伝受した模様が伺へる。寛元二年（一二四四）正月十九日の明恵上人十三回忌の供養には、他の多くの人々と同様に諷誦文を記してゐる。そして、建長三年（一二五一）には本書真言書目録を校勘してゐる。時に五十七歳。没年は未詳である。

以上の宮澤氏による紹介で長真の事跡については尽くされた感がある。なお、付け加えるとしたら、長真は、僧坊を持った

記録がみられず、法統の面ではどのような位置にあったか不明な点が多い僧侶である。華嚴関係聖教の借覧や、華嚴経の書写・比較などは華嚴宗との関わりを見せるものであるが、反面、左の1にあるように、目録作成としては、真言書目録の作成にあたっており真言密教との関係を伺わせる。

1 高山寺経蔵聖教内真言書目録(高山寺聖教類第一部247号)

一卷

○建長三年(一二五一)写、長真筆、

(奥書) 建長三年_{辛亥}四月六日授勘之了長真記之

2 常修仏光観略次第(高山寺聖教類第三部133号) 一帖

○貞応二年(一二二三)写、長真筆、

(奥書) 貞応二年二月八日於高山寺/西房南面酉時許書写

了/求法沙門長真<sub>生年
廿九才</sub>

3 大方広仏華嚴経卷第三十九(旧訳)(高山寺聖教類第四部第

六箱12号) 一卷

○鎌倉初期写、

(奥書) 寛喜二年壬正月二日以高山寺善知識供転読/本比較

了 長真

4 大方広仏華嚴経卷第六十三(旧訳)(高山寺聖教類第四部第

六箱23号) 一卷

○体裁同前、

(奥書別筆部分) 以高山寺善知識供転読本一校了 長真

5 大方広仏華嚴経卷第十六(旧訳)(高山寺聖教類第四部第六

箱33号) 一卷

○鎌倉初期写、

(奥書) 貞応二年九月八日於西山高山寺本堂/正面戌時許書

之了 長真

6 大方広仏華嚴経卷第二十九(旧訳)(高山寺聖教類第四部第

六箱40号) 一卷

○貞応二年(一二二三)写、

(奥書) 貞応二年九月十日於西山高山寺本/堂正面戌時許書

之了 沙門長真

7 大方広仏華嚴経卷第十五(新訳)(高山寺聖教類第四部第七

箱27号) 一卷

○鎌倉初期写、

(奥書別筆部分) 以善知識供時転読本一校了 長真

8 大方広仏華嚴経卷第三十九(貞元) (高山寺聖教類第四部第

七箱41号) 一卷

○貞応二年(一二二三)写、

(奥書) 貞応二年九月十二日於西山高山寺本堂正面/午時許

書之了 執筆長真

9 大方広仏華嚴経卷第七十七(新訳) (高山寺聖教類第四部第

八箱16号) 一卷

○鎌倉初期写、

(奥書) 一校了 長真

10 大方広仏華嚴経卷第二十一(新訳) (高山寺聖教類第四部第

一〇箱12号) 一卷

○鎌倉初期写、

(奥書) 一校了 長真

11 大方広仏華嚴経卷第三十五(新訳) (高山寺聖教類第四部第

一〇箱19号) 一卷

○鎌倉初期写、

(奥書) 以御堂本一校了 并成烈許切了 長真

12 包紙 (高山寺聖教類第四部第八七箱32号13) 一通

○鎌倉時代中期写、紙背文書

(紙背奥書) 寛元二年正月十九日沙門長真敬白

上見房(浄見房行弁)

上見房行弁は、『高山寺縁起』や『高山寺代々記』等の記録には「浄見房」と記されている人物である。浄見房は、高山寺の僧坊「観海院」の第一世で、行弁——澄基——澄高と続いている。建長八年入滅とある。左の現存本一覽で見ると、1のように俱舎論を傳領していたことや、『禅上房書籍欠目録』の書き入れでは、華嚴関係典籍を借覧していること、さらには華嚴経の書写を多数行っていたことなどから、華嚴宗に通じた僧侶とも見られるが、実際には真言密教の法統を色濃く受け継いでいることがわかる。それは、2の『調伏護摩次第』の奥書に見られるとおり、勸修寺理明房興然の法統を受け継いでいるからである

る。加えて、行弁の加點資料である3の『理趣經法』には、東大寺三論宗点が使用されており、宮澤俊雅氏によれば、高山寺において東大寺三論宗点の使用は、理明房興然流に限られるとされており、その指摘と矛盾しない。^{注九}また、先の『高山寺縁起』などの僧坊の記載によると、觀海院は、仁和寺の開田御室(法助)の住房となっており、この点もまた真言宗との関係が深いことが伺えるのである。

ちなみに、13の識語から明らかのように、この(題未詳)聖教は良尊(明蓮房)から行弁に伝えられ、後に静海へと伝領されており、行弁と静海との関係を伺わせる資料として興味深い。

1 俱舍論頌疏(高山寺聖教類第二部7号)

○建久二年(一一九一)写、

(内題)「論本第五」

(奥書)三校了(又別筆)行弁之

※この資料以外にも一括して多くの聖教が現存している。すべてが必ずしも同一体裁ではないが、ほとんどの奥書に「行弁」の記載が見られる。

2 調伏護摩次第(高山寺聖教類第二部81号) 一卷

○宝治元年(一二四七)写、静海筆、「心蓮院」单廓朱印、ヲ

コト点——東大寺三論宗点、

(端裏書)「甲五十三箱」(朱書)「力水箱」

(奥書)宝治元年四月六日於西山梅尾浄見房/空達房之本書写之了/抑此次第者理明房最秘事也是故/努々不可及他見々/金剛仏子静海廿二

3 理趣經法(高山寺聖教類第二部211号) 一卷

○建長三年(一二五一)写、行弁筆、ヲコト点——東大寺三

論宗点、

(端裏書)「東第七箱」「勸内中」

(奥書)建長三年十一月十四日書写了 行弁

4 随求法(高山寺聖教類第二部301号) 一卷

○建長三年(一二五一)写、行弁筆、

(端裏書)「勸内中」「東第七箱」

(奥書)写本云/保元三年八月十一日奉伝了興然/建長三年十一月七日書写了 行弁之本

5 大方広仏華嚴經卷第二十三・二十四(高山寺聖教類第三部

48号) 一帖

(表紙) 行弁

○建暦元年(一一二一)写、行弁筆、

(奥書) 八十華嚴經一部八帙之内依明惠房之御勸進(中略)于

時建暦元年六月十五日未剋許書写了/求法沙門 行弁

9 宋版教典残闕(高山寺聖教類第四部第四八箱1号2)

○(表紙) 行弁

6 大方広仏華嚴經卷第三十一・三十二(高山寺聖教類第三部

124号) 一帖

○建暦元年(一一二一)写、行弁筆、

(奥書) 八十華嚴經一部八帙之内依明惠房之御勸進(中略)于

時建暦元年七月十九日巳時許書写了 求法沙門行弁

10 七星如意輪次第(高山寺聖教類第四部第八二箱72号) 一帖

○鎌倉初期写、行弁筆、ヲコト点——東大寺三論宗点、

(奥書) 建保五季十月二十七日於丑時/許高山寺依円法房仰難
去/睡中書之行弁

7 大方広仏華嚴經(新訳)(高山寺聖教類第四部第一六箱11

18号) 八帖

○建暦元年(一一二一)写、行弁筆、

(奥書末尾) 于時建暦元年六月一日/ 求法沙門行弁(11号末

尾)

11 大毘廬遮那仏神变加持経義演密抄卷第十(高山寺聖教類第

四部第一三一箱2号7) 一帖

○建暦三年(一一二三)写、行弁筆、

(奥書) 建暦三季十月十一日於梅尾門脇之坊/申剋許書写畢
筆師僧行弁(以下略)

8 首楞嚴經義疏积要鈔第一・四(高山寺聖教類第四部第四七

箱21・22号) 二帖

○南宋時代刊、

12 大方広仏華嚴經卷第十三(旧訳)(高山寺聖教類第四部第二

五箱7号) 一卷

○承久二年(一二二〇)写、
(奥書)「追筆」「一校了」

承久二季正月廿二日高山寺住僧／行弁丑剋許書写畢

13 (題未詳) (高山寺聖教類第四部第一五六箱13号15) 一葉

○平安時代永暦元年(一一六〇)写、

(奥書) (別筆)「伝領静海」

永暦元年四月十五日儲之尤可秘之

(又別筆)「良尊之本」

(又又別筆)「行辯之本」

明心房(静海)

明心房は『高山寺代々記』の報恩院代々の前書きに見られる、明心上人静海かと考えられるが、その事跡には不明なところが多い。同じ『代々記』には、報恩院第二世に「明心(信イ)上人」とあり、その下に「静海」となっている。続けて「空達上人」と「開田准后」の二人の付法弟子であると記されている。血脈類聚記卷十二にも、開田准后法助の付法弟子として、「都賀尾上人／静海」とあり、下に「明心房上人云々」との記述が続いている。

しかしながら、『高山寺縁起』の僧坊一覧の、報恩院の箇所には、「報恩院代々」の下に続けて、割注形式で「山本坊明心上人静海ハ開田准后御附弟也／良平公息云々」とあり、報恩院第一世から、明順上人——明信上人——道惠上人と続いていて、「明心」と「明信」と区別しているように見える。これはどのように考えるべきであろうか。

先行研究では、報恩院第二世の明信は、字は禅忍房であり、承久元年(一二一九)から寛喜二年(一二三〇)まで、明信あるいは禅忍房の名前を拾うことができるとされている。^{注十}

本目録の書き入れにある記事から考えると、「明心房」は華嚴関係典籍を借覧しているのであり、この点は禅忍房所持の聖教(『禅忍房聖教目録』に記載)が華嚴関係典籍であることと一致している。しかし、『代々記』等の記録や、次の一覧に示す「明心房」や「静海」の名前を高山寺現存本から拾った結果からみると、明らかに真言密教関係の次第・作法等を多く書写しており、華嚴経に関しては二点に加点奥書が見いだされるのみとなっている。一方で、静海の僧名は、「華嚴血脈」(第四部第一四八箱42)には高弁——喜海——静海とあり、華嚴の法統を受け継いでいることとなっている。この点に関してはさらに考えてみたい。

次に、高山寺現存本から「明心房」あるいは「静海」の記述が見える資料を抜き出しておく。

- 1 温病加持作法包紙(高山寺聖教類第一部182号1) 一紙
○江戸時代末期写、
(裏)(略)開田殿、明心御房、御伝受云々明心御房、空師伝受之
旁一流之指南者也(後略)
- 2 字輪観等(高山寺聖教類第二部68号) 一卷
○建長三年(一二五一)写、静海筆、
(奥書抄出)建長三年九月廿三日於西山梅尾以光弁上人自筆
之草本書之了 / 仏子静海 / 一交之了
- 3 調伏護摩次第(高山寺聖教類第二部81号) 一卷
○宝治元年(一二四七)写、静海筆、「心蓮院」单廓朱印、ヲ
コト点——東大寺三論宗点、
(端裏書)「甲五十三箱」(朱書)「力水箱」
(奥書)宝治元年四月六日於西山梅尾浄見房 / 空達房之本書
写之了 / 抑此次第者理明房最秘事也是故 / 努々不可及他
見々 / 金剛仏子静海廿二
- 4 転法輪念誦記(高山寺聖教類第三部169号) 一帖
○宝治元年(一二四七)写、静海筆、ヲコト点——東大寺三
論宗点、
(表紙)「卅七」(朱書)「東十六箱」
(奥書)宝治元年三月十三日於西山梅尾 / 以空達房之本為興
隆仏法書写了 / 小比丘静海
- 5 大方広仏華嚴経第卅五(新訳)(高山寺聖教類第四部第一七
箱129号) 一帖
○鎌倉中期写、
(奥書)仁治三年十月一日於中房点了 静海法師
- 6 大方広仏華嚴経第卅九(新訳)(高山寺聖教類第四部第一七
箱130号) 一帖
○鎌倉中期写、
(奥書)仁治三年十一月十三日^{時子}許於中房西面学文所点了
沙門静海^{生年十五才}
- 7 薬師私次第(高山寺聖教類第四部第七五箱6号) 一帖
○文応元年(一二六〇)写、静海筆、

(奥書) 文応元年七月十七日理明房次第并集／諸秘口伝書之
了此尊秘伝戴之努、／莫他見而已／金剛仏子静海記之

8 (次第) (高山寺聖教類第四部第八七箱31号3) 一帖

○鎌倉中期写、

(卷中識語) 此次第目錄等載之不具本之／内也雖然端少分闕
計也静海／上人御筆跡也不可忽之本也／東箱之内可入之
(別筆) 書本云／正元、年二月廿四日記了／面受故実悉之但
為自行也更／勿他見而已 金剛仏子静海

9 作壇作法 (高山寺聖教類第四部第八七箱51号) 一帖

○正元元年(一二五九)写、静海筆、

(卷中奥書) 正元、年十一月一日為自行書之了／面受故実注
之更勿外見而已／仏子静海記之

10 受者加持 小供養法 高座加持 無言行道 (高山寺聖教類

第四部第九四箱9号5) 一帖

○江戸時代写、

(本奥書) 校合畢／本云／文永五年閏正月十三日於開田／房
授静海上人了(以下略)

11 不空羅索法 (高山寺聖教類第四部第九六箱4号12) 一帖

○室町初期写、

(本奥書) 本云／正嘉二年十二月廿五日付通用次第書之畢(中
略)／金剛仏子静海

12 氷揭羅天 (高山寺聖教類第四部第九七箱108号) 一通

○寛元四年(一二四六)写、静海筆、

(奥書) 寛元四年五月七日以空達房本書了／高尾浄覚房自筆
本云是尤秘書也／沙門静海生年_{廿一}

13 (題未詳) (高山寺聖教類第四部第一一箱3号) 一帖

○建長三年(一二五一)写、静海筆、

(奥書) 建長三年正月十三日於梅尾住房／書之了(中略)／金
剛仏子静海

14 (北斗法次第) (高山寺聖教類第四部第一一箱10号) 一帖

○文永元年(一二六四)写、静海筆、

(奥書) 文永元年八月二日開白 准御□／始修孔雀經法給依
天反也為助修／可修星供之由被仰仍為用意書／之了 金剛仏
子静海

15 華嚴血脈(高山寺聖教類第四部第一四八箱42号) 一鋪

○室町中期写、

(記事) 高弁——喜海——静海——照弁

19 加持温病法口伝私(高山寺聖教類第四部第一四八箱74号34)

一通

○嘉曆二年(一二三二六)写、仁弁筆、

(本奥書) 正元、年五月二日对明心房／伝受了此作法故上人

明惠房／抄(以下略)

(奥書) 嘉曆二年五月十六日以空行房定經書籍本ヲ以テ(中略)開

田准后／明心房御伝受之次自空行／房伝受云々／沙門仁弁五十八

16 (題未詳)(高山寺聖教類第四部第一五六箱13号15) 一葉

○平安時代永曆元年(一一六〇)写、

(奥書)(別筆)「伝領静海」

永曆元年四月十五日儲之尤可秘之

(又別筆)「良尊之本」

(又又別筆)「行辯之本」

20 初夜(高山寺聖教類第四部第一六九箱44号) 一通

○室町初期写、

(奥書) 於開田殿准后御授与／明心房之時聽聞之記之

17 後加持作法(高山寺聖教類第四部第一七二箱4号22) 一通

○宝治元年(一二四七)写、

(奥書) 宝治元年十月二日以空達房之本書写之了□法□者静

海廿二歳

教惠房・法明房

この二名の僧侶については、事跡を探す以前に問題がある。

まず、前者については、本文が墨で抹消してあり、完全な判読

が不可能な状態である。正確には「□惠房」であり、先頭の文

字は判読が難しい。素直に読めば「教」の字が最も適当と思わ

れるのであるが、そうすると、高山寺内で該当する僧侶は見あ

たらない。二文字目と三文字目は明らかに「惠房」と読めるの

で、それで可能性のある僧名は以下の通りである。年代的に明

18 (表白目録)(高山寺聖教類第四部第二〇二箱1号20) 一葉

○鎌倉中期写、静海筆、

(奥書)(裏面) 此表白目録未載之不具本之内／也雖然端一折

計不足也静海上人／御筆跡不可忽々束箱之内可／入之者也

らかに該当しない僧侶は除く。

明恵、行恵(観海院)、観恵(観海院二世)、道恵(法恩院三世)、顯恵(覚蘭院三世)、敬恵(西本坊第二世 永弁)、仁恵(西本坊第三世 円海)、十恵(清水坊第一世)

先頭の明恵は除くとしてもこれだけの僧侶がほぼ同時代にいたと考えられ、目録の一箇所の書き込みだけではとうてい特定できるものではない。

次の「法明房」にしても、同名の僧侶は高山寺に活動の跡を見つけることができない。目録の書き入れは正確には「法□房」ともすべきであり、中の文字は「明」に極めて近い字体としか言えない。そうなると、高山寺内においては「法智房」しか考えられないのであるが、二文字目は「智」とは明らかに異なっており結局の所、現状では不明とせざるを得ない。

五

最後に、ここまで検討してきたことをまとめる。

『禅上房書籍欠目録』に加えられている書き入れは十数カ所にあるが、最も多い書き入れは聖教の借覧に関する人名注記であ

る。合わせて六名の僧名が確認できるが、その内の二名については、僧名であることは確実であるが、特定するに足る情報を得ていない。残りの四名については、高山寺現存の聖教の奥書・識語などや、記録類からもその事跡を跡づけることが可能である。

本目録に関する借覧状況を見ると、ほとんどが華嚴関係典籍に集中しており、高山寺における教学活動の実態を、現在に伝えるものとして重要な資料であると考えられる。土井光祐氏は、高山寺における教学活動と僧坊の関係において高山寺関係資料を博搜され次のように述べている。^{注十一}

高山寺における「講説」と「伝授」の活動は、概ね高山寺内部の頭塔（タカ）の違いに基づく学統の相違によつて、活動内容に著しい差異が認められる。

「伝授」の活動は明恵以後、方便智院を中心とし、十無尽院では第三世の経弁以降に相承されたが、「講義」の活動は、明恵以降は、喜海、高信、順高といった十無尽院関係の限られた学僧の間でのみ継承され、高信以後は、活動の場を高山寺ではなく神尾山寺に移して実践された。(以下略)

土井氏による右の論考と、本稿で見てきた僧侶の聖教の借覧状況とを合わせて考えてみると以下のようなようになろう。

高山寺において開祖明恵上人による華嚴の「講説」がしばしば行われ、弟子達が参列した。その「講説」の継承は、中でも華嚴宗を学問の中心としてきた十無尽院第一世である、義林房喜海によって行われたが、高山寺内ではそれを発展・継承された形跡は見られず、むしろ、神尾山寺に移り高信、順高という方面でのみ継承されていった。しかし、平行して、寺内の十無尽院以外の僧侶も、当然明恵の講義に参列していただであろうし、その「講説」についての学習も行われていたはずである。その学習形態は、本目録の書き入れに見られるように、寺内経蔵にあった華嚴関係典籍の借覧および、それに伴う教学活动という形であると考えられる。高山寺に現存する聖教の奥書に、まれに教学活动の実態を伺わせる記述が報告されており、本目録からも華嚴関係の聖教を複数の僧侶が、時には箱全部を借りだしていることも傍証となるものである。

真言密教に関しては、当然「伝授」も盛んに行われてはいたのであろうが、それに伴う聖教の借覧が実際に行われていたかどうかについては本目録には一切記録がない。この点に関しては、他の資料も合わせて再検討する必要がある。

本目録の作成年代については、従来鎌倉中期というだけで、詳細な検討はされていない。そこで、本目録の作成年代につ

て検討する。

本目録に書き入れられた僧名が手掛かりにして、事跡がある程度判明した僧侶とその生存時期をあげると、以下のような

十眼房 (長真)	一一九五	一一二五一存 (没年未詳)
上見房 (行弁)	一一二一	存 一一二五六没
法智房 (性実)	一一七八	一一二六〇没 (『高山寺代々記』)
明心房 (静海?)	一一二五	生 一一二六四存 (没年未詳)

右の四名の僧名が記載されていることから、本目録は少なくともこの僧侶が同時に生存し、活躍していた年代に作成したと考えるのが自然であろう。その下限は文永元年(一二六四)である。しかし、その活動の時期だけではあまりに長い期間にわたりすぎ、年代を特定できるものではない。この点については、別稿を用意している。

以上、『禅上房書籍欠目録』に見られる書き入れ、特に僧名について事跡を中心に整理した。今後、さらに本目録の成立事情と、高山寺における教学活动について検討していく予定である。

注

- 一 奥田勲・宮澤俊雅・石塚晴通編『高山寺経蔵古目録』(一九八五年二月、東京大学出版会)
- 二 德永良次「高山寺蔵『禅上房書籍欠目録』について」(高山寺典籍文書綜合調査団編研究報告論集、二〇〇〇年三月)
- 同 「高山寺蔵『禅上房書籍欠目録』について(二)」(高山寺典籍文書綜合調査団編研究報告論集、二〇〇一年三月)
- 同 「禅上房書籍欠目録解題」(『統高山寺経蔵古目録』東京大学出版会、二〇〇二年三月)
- 三 奥田勲「明恵 遍歴と夢」(東京大学出版会、一九七八年十一月) 218頁。また、注一文献にも詳細な御論考がある。
- 四 禅浄房の事跡については、注三文献の189頁参照。また、筆者も注二文献において検討したことがある。
- 五 注一・三の奥田氏の論考などを参考にした。
- 六 『法鼓臺聖教目録下巻』と禅浄房の灌頂聖教との関係については、筆者は下記の論考を公にしている。
 德永良次「高山寺蔵『聖教目録／禅浄房／灌頂』について」(高山寺典籍文書綜合調査団編研究報告論集、一九九九年三月)
- 同 「『聖教目録／禅浄房／灌頂』に記載された聖教について」(鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 第二十三輯』、二〇〇〇年十月、武蔵野書院)
- 七 注三文献参照
- 八 注一文献、302頁。
- 九 宮澤俊雅「高山寺に於ける理明房興然流口決の訓点の相承について」(訓点語学会編『訓点語と訓点資料』第95輯、一九九五年三月) 40頁。
- 十 注三文献、187頁。池田証寿「聖教目録(林月坊聖教目録／禅忍房聖教目録／平泉寺律師頭範聖教目録／理行房聖教目録)解題」(『統高山寺経蔵古目録』、東京大学出版会、二〇〇二年三月) 38頁
- 十一 土井光祐「高山寺関係聞書類の資料的性格と学統——講説聞書と伝授聞書とをめぐって——」(訓点語学会編『訓点語と訓点資料』第95輯、一九九五年三月) 98頁